

# キアンコウの謎を探る —安いアンコウを獲るのは『もったいない』—

## 寄稿

私は現在むつ水産事務所に勤務し、主に漁業許可、漁船登録事務などを担当しています。この地に赴任してまもなくの頃、地元の漁業士会員と懇談した際、「春先にアンコウがたくさん網に入るが値段がkg当たり200～300円と二束三文だ。冬場になるとkg当たり1,500～2,000円で、大型になると一匹2万円にもなる。安いアンコウを獲るのは『もったいない』。なんとかならないか」という相談を受けたことがあります。その後、キア

下北地域県民局地域農林水産部

むつ水産事務所 水産課長 野呂恭成

ンコウさし網漁業許可を検討することになり、資源管理上の観点からキアンコウのことを調べ始め、管内の漁業関係者の協力を得て標識放流を行っています。ここではキアンコウの謎探求について紹介します。

一般に「アンコウ」と呼ばれていますが、本県で漁獲される「アンコウ」は分類上「キアンコウ」という種類です。また、東シナ海などに分布する分類上「アンコウ」という種類もあります。キアンコウは日本周辺に広く分

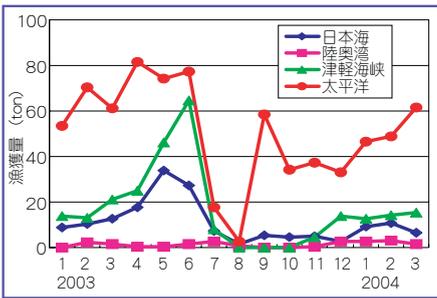


図1 青森県沿岸におけるキアッコウの月別海域別漁獲量の推移

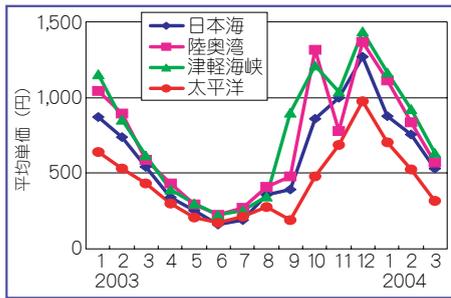


図2 青森県沿岸におけるキアッコウの月別海域別平均単価の推移

布し、特に東北、常磐海域では主に底びき網漁業の重要種となっています。

2003年の青森県全体のキアッコウ漁獲量は964トンと推定され、全国の上位にあると考えられます。海域別には太平洋601トン、津軽海峡210トン、日本海137トン、陸奥湾16トンで、太平洋では主に底びき網で、津軽海峡ではさし網、定置網で漁獲されます。漁獲時期は、太平洋では底びき網漁業が休漁の7、8月を除いてほぼ周年、津軽海峡では1月から徐々に漁獲量が増加し、6月に最も多く、秋～冬期には低く推移しています(図1)。平均単価は「冬高夏低」で、12月に976～1,434円で最高に、6月に161～227円で最低となっていました(図2)。

移動と成長を把握するため、東通村と風間浦村から2005年に281個体、2006年に296個体の合計577個体の標識放流を実施し、2006年12月2日までに14個体が再捕されました(写真1、2、図3)。再捕までの経過日数は1～373日で、100日以上は10個体でした。津軽

海峡から放流後、津軽海峡内で22日後～318日後に計4個体が再捕され、他の10個体は北海道、青森県、岩手県、福島県の太平洋沿岸で再捕されました。最も遠くまで移動した個体は東通村で放流され373日後に福島県浪江町沖で再捕された個体で、移動距離は約400kmと推定されました。放流後の成長では、再捕時までに全長で3.2～18.9cm、体重で-0.5～2.5kgの増加が認められ、最も成長した個体は、全長40cm(推定体重1.07kg)で放流され351日後に全長58.9cm、体重2.9kgで再捕されました。風間浦村で2005年5月と2006年6月に放流され、約半年後の12月に同じ風間浦村で再捕された個体は、それぞれ1,600円/kg、1,300円/kgで販売され、冬季の単価アップと再捕時までの体重増加を勘案すると1個体当たりの経済的価値の相当な増加が認められました。



メス？を追いかけてきたオス？3匹も一網打尽



写真1 標識付け作業



写真2 再捕されたキアッコウ



図3 標識放流されたキアッコウの再捕位置と漁法

た。放流後の成長では、再捕時までに全長で3.2～18.9cm、体重で-0.5～2.5kgの増加が認められ、最も成長した個体は、全長40cm(推定体重1.07kg)で放流され351日後に全長58.9cm、体重2.9kgで再捕されました。風間浦村で2005年5月と2006年6月に放流され、約半年後の12月に同じ風間浦村で再捕された個体は、それぞれ1,600円/kg、1,300円/kgで販売され、冬季の単価アップと再捕時までの体重増加を勘案すると1個体当たりの経済的価値の相当な増加が認められました。

2005年1～6月に風間浦村蛇浦地区で漁獲されたキアッコウを計数したところ、月別漁獲個体数は1～4月は数百個体、5月には2,752個体、6月には8,194個体と5～6月に急増しており、5～6月に産卵のため沿岸に移動すると考えられました。また、風間浦村下風呂では、春季に水深50～80m付近で釣った大型個体(メス?)をゆっくりたぐり寄せたところ、後ろを3個体の小型個体(オス?)が追いかけてきて、海面付近で小型の3個体も一緒に漁獲したという話を聞きました(イラスト)。この時期、海底ではメスの回りを複数のオスがうろうろし、授精の機会をうかがっているのではないのでしょうか。また、キアッコウは水深50～80mの海底から容易に水面付近ま

で泳ぎ上がることが可能であることがわかり、キアコウが水鳥を捕食していたという事例と合致します。

津軽海峡、太平洋周辺の漁業者から、毎年6～7月頃に産卵されたキアコウの漂流卵帯をよく見かけるといふ情報を得、実際、2005年8月

に易国間地区の小型定置網でキアコウのものと思われる卵帯が採集されました(写真3)。また、2005年6月に青森県水産総合研究センター試験船東奥丸が青森県尻屋沖の太平洋上で釣獲したミズウオの胃内容を調べたところ、浮遊期間中のキアコウと推定される稚魚十数個体を観察しています(写真4)。

以上のように、キアコウの謎が徐々に解明されつつあります。また、標識放流した個体が比較的短期間に成長し、数個体が単価の高い冬季に再捕されたことか



写真3 キアコウ?の卵帯



写真4 ミズウオの胃内容

ら、多獲・低価格時の春～夏季に本種を再放流し、高価格時の冬季に漁獲を移行させることが資源管理・漁業経営上、推進すべきことと考えられました。

2004年にノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ女史が、日本語の『もったいない』という言葉に感銘を受け、世界に広めようと提唱し、その後様々な分野で『もったいない』が推奨されています。水産の分野でも『もったいない』という気持ちを大事にしたいものです。